

「問いづくり」の授業に対する生徒の声

- 教材や教科書の内容についてある程度理解できていないと質問を作れないから、質問作りをするためにしっかりと教材を読もうという意識に繋がった。質問は興味からくるものだからさらに知りたいと思うことができる。
- 先生から教えてもらう授業よりも楽しいのと、自分の力で答えを導き出す方が長く覚えていられるし、考えるから力もつくと思う。
- 暗記するだけではなくて、自分で答えを導くために考えるのは、詳しく理解することにつながると思う。質問づくりは、他の人の意見を聞いたりするので、視点がさらに広がると感じた。
(下線は筆者)

「開いた質問」を「閉じた質問」に変える過程では、ある一定自分なりの答えを用意する必要があり、仮説構築の育成にも一役買っている。さらに、「問いづくり」を継続して取り組むことで、物事の本質を明らかにするための質問を生み出す力がどの生徒にもついてきている。また、生徒の声にもあるように、自ら考えた問いを解決するプロセスを通じて、学習への理解が深まっていることがわかる。

(2) 主体性を向上させる「自由進度学習」と「複線型授業」(Plan-Act-Reflect)

「複線型の授業」と「自由進度学習」を各教科の授業において取り入れ、生徒が自ら学びを調整し主体的に学習に取り組むことができる授業展開を心掛けた。

中学3年生の授業実践より

詩の効果的な表現を分析する 3年 名前()	「挨拶→原稿の写真によせて」 学習記録
GOAL 作者が伝えたいことを理解し、現代社会について考えを深める	振り返り(できたこと・わかったこと・わからなかったこと・疑問)
1 省流 質問づくり 言い換え	詩についてたくさん疑問を持つ
2 質問の優先順位 作者の伝えたいこと	作者の伝えたいことがなんとなくわかる。
3 自分の考えたことを語る	作者の情報を踏まえて、詩について考える。
詩を分析しよう(表現、効果)	
地球が原爆を〜では擬人法が使われており、表現がマイルドになっている印象がある。他にも友と読者に呼びかけたり、慄然・静か・見極めるなどところどころでひらがなが使われている。それによって一つの物語のような優しい感じがする。大まかなテーマは平和に感謝原爆を忘れないなみたいな感じなのに、そこまで強い表現を使わないのは、作者自身も読者と同じように油断していたからなのかなと思った。平和の終わりには合図がない。静かに忍び寄ってくるものなので、この詩の静かでありながら密かに感じる恐怖。原爆のテーマにびったりだと感じた。	

【単元のゴール】
拡大図・縮図として学習したものを、相似という概念で捉え直し、相似の性質を利用して長さや角度を求めることができる。また、相似の概念を空間図形にも拡張し、それをもとに立体の辺の長さ、表面積、体積を考察することができる。

課題番号	教科書のページ	スタディサプリ	学習クラブ(1.グリ)
① 相似とは	143～147		55
② 相似比	148～149	5001	56
③ 相似な図形をかく	150～151	5011	57
④ 三角形の相似条件	152～153		
⑤ 相似な三角形を見つける	154	5002, 5003	58
⑥ 相似であることの証明	155	5004, 5005	59
⑦ 相似な図形の面積比	156～157	5014	
⑧ 相似な図形の面積比を使う	158	5015, 5016	65
⑨ 相似な立体の表面積の比、体積の比	159～160	5017, 5018	66
⑩ チェックテスト	161		
⑪ 三角形と比	162～163		
⑫ 三角形と線分の比の定理を使う	164	5006, 5007, 5008	62
⑬ 三角形と線分の比の定理の逆について	165～166		
⑭ 中点連結定理	167	5012	
⑮ 中点連結定理の利用	168～169	5013	64
⑯ 平行線と線分の比	170～171	5009	63
⑰ 角の二等分線の比	172～173	5010	
⑱ チェックテスト	174		
⑲ 相似の利用①	175～177		60
⑳ 相似の利用②	178～179	5019	
単元テスト	182～183		
レポート 章のまとめ			

図4 生徒と共有する単元計画 (SPARK-W) 例 (国語・数学)

【数学科の実践より】

(複線型授業)

授業の導入は、一斉形態で本時のポイントの確認と個人解決の時間を10分程度行う。その後「全体(教師が教える)」「グループ(友達と教えあう)」「個人」での学習方法を選択し、それぞれの活動へ入るように授業の流れを作った。自分で授業形態を選択できることは生徒からおおむね好評の声があがっていた。理由としては、グループ活動が楽しいということ、分からなくても友達に聞きやすいということがあった。肯定的な理由とも言えるが、見方によっては、自

己の課題に向き合えず、学力に結びつかない可能性があるとも捉えられる。このことから2学期からは複線型の授業の良さを残しながら、自由進度で学ぶ学習を授業内の後半に取り入れた。

(自由進度学習)

授業の前半は、一斉授業で「誰もが理解してほしい共有の課題」を提示する。課題解決の過程を通して、学習の内容の理解を促し、その後は演習の時間を確保する。この演習の時間が自由進度での学習になる。自由進度学習では、自分の現状や課題を知ることが不可欠である。そこで、上記に図示した OPP シートを授業初めに配布し、自分が今どのページやどのプリントに取り組んでいるのかを把握できるようにした。また、「わかった！できた！」「こんなに頑張った！」という達成感が意欲を高めると考え、途中式や解答は、各自で用意した演習用のノートに取り組む仕組みを作った。

演習の時間では、ICT を活用し、プリント、教科書の補充問題（二次元コードの活用）、解説動画視聴後に取り組む類似問題、インターネット上の問題、教師提示の応用問題など、自分に合った教材、内容を選択できるようにした。そのことにより、それぞれが自分の進度や力量に合わせた問題演習に集中して取り組む様子が見られた。また、分からない問題に直面したときは、教師に声をかけるか近くのクラスメイトに声をかけ、最後まで粘り強く考えている生徒の姿が見られるようになった。

(3) 教職員研修のシンカ

本研究では、探究のサイクルを教科授業に取り入れるため、「教職員研修」を研究推進の重要な柱として位置付けた。主体的・対話的で深い学びを実現させるためには、教師自身が授業実践を振り返り、対話を通して改善していくことが不可欠である。そこで、月に1度の校種をつないだ研修会や自校の研修会を実施した。

研修会では、各種診断テストを用いた学力分析、アンケート分析はもとより、熟議を通して教職員研修を実施し、SPARK-W モデルに基づいた授業改善を組織的に進めた。

取組の流れを明らかにするため、年間の主な取組を表1に示す。

表1 教職員研修計画

時期	主な取り組み	ねらい
4月	小中一貫総会	本校区の児童生徒の強み・課題の確認、研究の方向性、計画の共有
5月	小中一貫研究会、授業実践開始	主体的な学びの導入と実践の共有
6月	授業参観ウィーク 小中一貫 ICT 活用研究会（講師招聘）	生徒を主体的にする授業づくり ICT を活用した個別最適な学びの促進
7月	アンケート実施(ScTN 質問紙、独自調査)	学びの実態把握
8月	小中一貫授業研究会（講師招聘） サーベイフィードバック研修会	認知能力・非認知能力の伸びの分析と実践の意味づけ
9月	小中一貫授業研究会	単元構想・授業計画の作成

10月	小中一貫授業公開 及び 研究会	実践の深化
11月	小中一貫授業公開 及び 研究会	実践の深化
12月	小中一貫役員会	成果と課題を踏まえた計画立案
1月	小中一貫授業研究会 熟議（小学生、地域・保護者）	実践の振り返り 心理的安全性を高める取組の実施
2月	アンケート実施、授業改善研究会	生徒の実態を学校経営と授業改善に活かす、「対話（笑タイム・笑トーク）」を活かした授業づくりについて
3月	授業参観ウィーク・授業研究会、小中一貫総会	実践の成果と課題の振り返りの共有、次年度への接続

生徒アンケートを実施した際は、アンケートの結果を基に、生徒の学びを自分事として捉える授業を実現するため、生徒や地域の方々とともに授業を振り返る機会として「熟議」を実施した。

1学期末には生徒が、3学期末には教員がファシリテーターとなり、以下の視点で話し合いを進めた。

<p>①当事者意識が生まれる授業には何があるのか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業で「自分が当事者だ」と感じた瞬間はいつか <p>②思考を揺さぶる仕掛けは何か</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学びが「深まった」と感じた場面はどこか <p>③教員が手放した場面・支えた場面の意味づけ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒と教員で「一緒に授業を創っている」と感じたか <p>④生徒の提案をどう授業デザインに生かすか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・もし次に同じ授業をするなら、どう変えるといいか ・主体的に取り組んでいる授業と、取り組めていない授業の差は何か
--

生徒からは「自分が作った問いに対する仮説をたてることで授業内容が頭に入る」「先生は全て教えるのではなく、ヒントを与えるだけでいい。自分で考えたい」といった意見が出され、教員にとって自身の授業を見直す機会となった。

<p>（教員の振り返り）</p> <ul style="list-style-type: none"> ●日常につなげた授業づくりを心がけていたつもりだったが、生徒には結び付いていなかったことが分かった。教科の学びをどう普段の生活につなげるかを考えていきたい。 ●活動あって学びなしにならないように学びを保証していく必要があると感じた。脳がアクティブになるような授業を作っていく。 ●体験を通して学ぶ授業。生活とのつながりのある授業について考えていきたい。生徒にとって毎時間どんな力がついたかを可視化、言語化することで学びが深まると思う。 ●生徒を主役にした授業をデザインできていないと感じた。アクティブな時間の設定を考えた授業設計をしたい。 ●生徒が主体となって活躍する場面を授業中に作る。

生徒とともに創る授業を目指し「熟議」を行ったことで、生徒にとっても、授業が「与えられ

るもの」から「自分たちで創るもの」として捉える意識が生まれてきた。これは、ラーニング・コンパス 2030 が示す「学習者エージェンシー」の構築に寄与していると考えられる。

3. 研究の成果

本研究は、アンケート調査（①ScTN 質問紙ベーシック (<https://sctn.jp/questionnaire>)、②自作作成アンケート）を1学期末と3学期末に実施し成果の検証を行った。以下のデータ（図5）は、学力中位層のデータを示している。

生徒アンケートを分析すると、学力中位層において、「主体的・対話的で深い学びの経験」を示す「学校教育の経験」のすべての項目で伸びが見られた。

その中でも特に「自分の考えをもって授業に参加できている」「授業中に考える時間が増えた」といった項目が大きく伸びていることがわかった。



図5 学力中位層（全校生徒）における ScTN 質問紙の比較結果（1学期→3学期）

これは、生徒が授業中に自分で考えたり、友達の意見を取り入れたりする時間が増えてきたことを表していると考えられる。

また、学びへの調整力や動機をみる「学びに向かう力」の項目を比較すると、グループ活動で粘り強く取り組む、仲間からの支援で学びを深めているといった「学びの相互調整力」や、失敗を恐れず学んだり、目標をたて、達成に向けて粘り強く取り組んだりする「学びの自己調整力」において伸びが見られた。（図6）

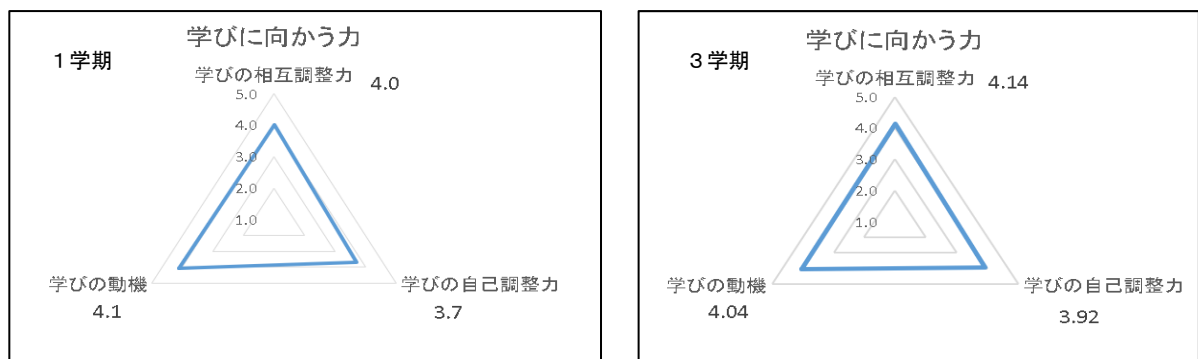


図6 学力中位層（全校生徒）における ScTN 質問紙の比較結果（1学期→3学期）

加えて、生徒の問いから授業を組み立て、自由進度学習や複線型授業を取り入れて取り組ん

でいる教科においては、生徒の学習状況を見取りながら支援する場面が増え、生徒の授業への満足度も上がった（表2）。これらの結果は、生徒が問いを持ち、学習の見通しを立て、振り返りながら学ぶ授業設計(SPARK-W モデル)が、生徒の主体的な学習行動につながった可能性がある。

表2（質問に対する肯定的回答率）85%以上は太字

質問内容	国語	社会	数学	理科	英語
自分事として教科の授業を受けている	86.9%	84.3%	89.5%	84.2%	76.3%
本時のめあてや単元構想が示されていて、学習する内容に見通しが立っている	86.9%	81.6%	88.1%	80.2%	69.7%
授業の中で自己決定する機会や学びを自己調整する機会があり、それが学びに役立っている	92.1%	86.8%	91.5%	85.5%	78.9%
他の人の意見を参考にする機会や意見を交流し合う機会がある	97.3%	79.8%	96.1%	90.8%	88.2%

以下（図7）は、学びのパスポート（京都府教育委員会作成の学力調査）の現2年生の結果である。入学時は学級が落ち着かず、学習に向かえない生徒が複数名いたが、今年度「SPARK-W」を学習で回すことを意識し、授業改善を進めてきたこともあり各教科において伸びが見られた。

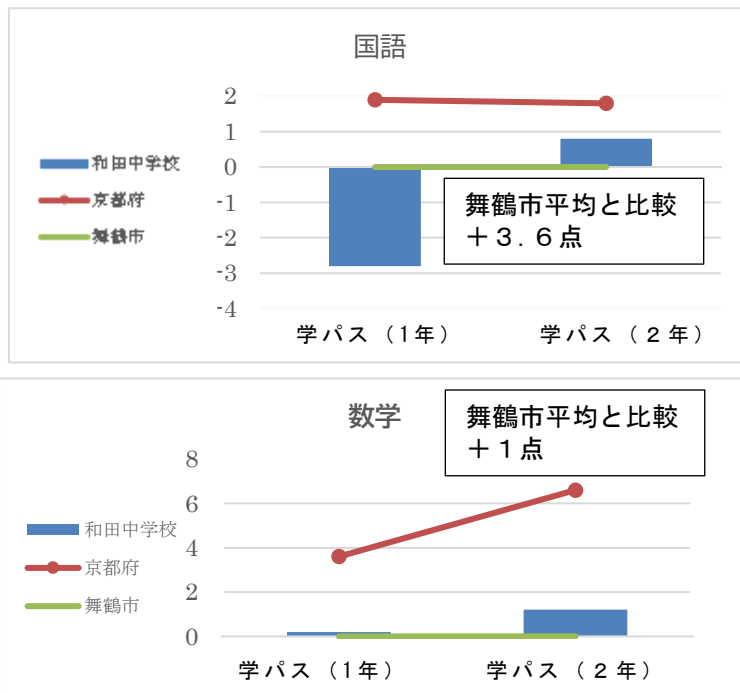


図7 学びのパスポートによる学力の伸び

という「本物の学び」に関する項目では肯定的回答が年間を通して低いこと、また、他の人から勧められたことは、興味がなくとも、自分で調べたりやってみたりしているといった「学びの動機」の数値が下がっていることが、本校の課題として残っている。それらの理由として考えられるのは、①日常生活や社会課題との関連付けが弱いこと、②生徒が自らの問いを単元全体の見通しと結び付ける経験が限定的な教科に偏っていること、③教科間で探究サイクルの取り扱いに

もちろん、生徒一人ひとりの学習への取り組み方の変化や家庭学習の定着など複合的な要素が考えられるが、とりわけ授業改善が学力向上に寄与している可能性が高い。

具体的には、見通しを持ち、主体的に学ぶための課題の提示やゴール設定、考えたくなる発問や、対話的な学習場面の設定など、認知能力の育成を意識した授業づくりが、学習内容の理解や定着につながったと考えられる。

しかしながら、普段の生活のことや、社会で問題・話題になっていることを材料に学んでいる

差があること、の3点が考えられる。これらの点を踏まえ、次年度は「各教科の見方・考え方を核とした探究のサイクルの実装」を研究テーマとして共通確認し、学びの連続性の強化を図る。

4. おわりに

本研究では、探究のサイクル（SPARK-W モデル）を組み込み、授業改善を進めてきた。特に「See（現状把握）」「Plan（学習の見通し）」「Act（課題解決の実践）」「Reflect（振り返り）」の循環(keep going)を意識した授業設計を行ったことで、生徒が自ら問いを持ち、学びを調整しながら課題に取り組む姿が見られるようになった。

また、ScTN 質問紙や授業アンケートの結果では、生徒が自分の考えを持って授業に参加する機会や、授業中に考える時間が増えたことを示しており、SPARK-W モデルを基盤とした授業改善が主体的・対話的で深い学びの形成に寄与している可能性がある。これは、ラーニング・コンパス 2030 が示す「学習者エージェンシー」の具体化を学校現場で試みた実践研究として位置付けることができると考えている。

また、本研究を通して教師の授業観にも変化が見られた。これまでの授業では、教師が学習内容を説明し理解させることに重点が置かれる場面が多かったが、問いづくりや自由進度学習、複線型授業を取り入れることで、生徒の学びを支援する役割へと意識が変化してきた。また、授業研究会や熟議を通して生徒の声を聞く機会が増えたことにより、「どのように教えるか」から「生徒がどのように学ぶか」を重視した授業づくりへと授業観がシフトしてきている。

来年度は小学校と連携をさらに強め、「各教科の見方・考え方を軸にした授業で回す探究のサイクル」をテーマに研究を進める予定である。小学校段階から探究的な学びを行い、知的好奇心に火を灯し続けること、また、中学校にそれをつなぐことで、主体的・対話的で深い学びの実装と学力向上を確かなものにしていきたい。本校区は施設分離型の小中一貫教育の形態であることから、日常的な連携が難しい面もあるが、その一方で、カリキュラムや指導観を共有することで、学びの接続を図ることができると考えている。

本研究の実施にあたり、多大なるご支援を賜りました公益財団法人パナソニック教育財団様に深く感謝申し上げます。今後は、本研究を通して得られた貴重な学びと成果もとに、教育実践のさらなる充実に努めるとともに、子どもたちのよりよい学びの実現に向けて取り組んでいきたい。さらに、小学校との連携を通して探究のサイクルを共有し、学びの連続性を高めることで、施設分離型小中一貫教育の可能性を探っていく。

5. 参考文献

- 1) 文部科学省 (2025) 『論点整理』
- 2) ダン・ロス・スタイン・ルース・サンタナ(2020年)『たった一つを変えるだけ クラスも教師も自立する「質問づくり」』新評論
- 3) 奈須正弘・伏木久始(2023)『「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指して』(北大路書房)
- 4) 奈須正裕 (2022) 個別最適な学びの足場を組む。(教育開発研究所)